

第二菑蕪本

泉鏡花

青空文庫

雪の夜路よみちの、人影もない真白まっしろな中を、矢来やらいの奥の男世帯へ出
先から帰った目に、狭い二階の六畳敷、机わきの傍なる置炬燵おきごたつに、
肩まで入って待っていたのが、するりと起直った、逢いに来た婦おんな
のひとえひとえ一重々々、燃立つような長襦袢ながじゆばんばかりだった姿は、思い懸け
ずもまた類たぐいなく美しいものであった。

はだ おお膚を蔽おほうに紅くれなのみで、人の家に澄まし振ふり。長年連添ついでつて、気心
も、羽織も、帯も打解けたものにだつてちよつとあるまい。

世間も構わず傍若無人、と思わねばならないのに、俊吉は別に

怪あやしまなかつた。それは、懐しい、恋しい情が昂あがつて、路々の雪ゆきつ
礫ぶてに目が眩くらんだ次第ではない。

——逢いに来た——と報知しらせを聞いて、同じ牛込、北町の友達の
家うちから、番傘を傾け傾け、雪を凌しのいで帰る途中も、その婦おんなを思
と、鎖とぎした町家まちやの隙間洩もる、灰ほのかな燈火あかりよりも颯さつと濃い緋ひの色を、
酒井の屋敷の森越に、ちらちらと浮いつ沈みつ、幻のように視みた
のであるから。

当夜は、北町の友達のその座敷に、五人ばかりの知ちかづき己おのれが集つ
て、袋廻しの運座があつた。雪を当あて込んだ催もよおしではなかつたけれど
も、黄たそがれ昏くれが白くなつて、さて小留こやみもなく降ふり頻しきる。戸外おもての寂さ
寞みしいほど燈ともの興しびは湧わいて、血氣の連中、借錢ばかりにして女房

なし、河豚ふぐも鉄砲も、持って来い。……勢いきおいはさりながら、もの凄すごいくらい庭の雨戸を圧して、ばさばさ鉢前の南天まで押寄せた敵に対して、驚破すわや、菟うれと、木戸を開いて切つて出いづべき矢種はないので、逸雄はやりおの面々はがみ齒嚙はがみをしながら、ひたすら籠城ろうじようの軍議一決。

そのつもりで、——千破ちはや矢の雨滴あまだれという用意は無い——水の手の爛徳利かんどくりも宵からは傾けず。追加の雪の題が、一つ増しただけ互選のおくれた初夜過ぎに、はじめて約束の酒となった。が、筆のついでに、座中の各自てんでが、好すき、悪きらい、その季節、花の名、声、人、鳥、虫などを書きしるして、揃ひとつつた処で、……何某なにがし……好きなものは、美人すき。

「遠慮は要らないよ。」

悪むものは毛虫、と高らかに読上げよう、という事になる。

箇条の中に、最好、としたのがある。

「この最好というのは。」

「当人が何より、いい事、嬉しい事、好きな事を引くるめてちよつと金麩羅きんぷらにして頬張るんだ。」

その標目みだしの下へ、何よりも先に〓〓待人きた来る〓〓と……姓を吉岡と云う俊吉が書込んだ時であつた。

ふすま
襖をすうと開けて、当家の女中が、

「吉岡さん、お宅からお使つかいでございます。」

「内から……」

「へい、女中さんがお見えなさいました。」

「何てつて？」

「ちよつと、お顔をツて、お玄関にお待ちでございます。」

「何だろう。」と俊吉はフトものを深く考えさせられたのである。

お互に用の有りそうな連中は、大概この座に居合わす。出先へこうした急使の覚えはいささかもないので、急な病氣、と老人としよりを持つ胸こたに応えた。

「敵の間まわしもの 課 じゃないか。」と座の右に居て、猪口ちよくを持ちながら、膝の上で、箇条を拾っていた当家の主人が、ト俯向うつむいたまま
で云った。

「まさか。」

とみまわすと、ずらりと車座が残らず顔を見た時、あかり燈の色がさつ颯と白く、雪が降込んだように俊吉の目に映った。

二

「ちよつと、失礼する。」

で、引返して行く女中ゆのあとへついて、出しなに、真中まんなかの襖ふすまを閉める、と降積ふりつもる雪の夜は、一重ひとえの隔へだても音が沈んで、酒の座は摺退すりのいたように、ずつと遠くなる……風の寒い、冷い縁側を、するする通つて、来馴きなれた家うちで戸惑いもせず、暗がりの座敷を一問、壁際を抜けると、次が玄関。

取次いだ女中は、もう台所へ出て、鍋なべを上る湯気の影。

そこから彗ほうきぼし星ほしのような燈あかりの末が、半ば開けかけた襖越ほのか、仄ほのかに玄関の畳へさす、と見ると、沓脱くつぬぎの三和土たたきを間あいに、暗い格子戸くつにびたりと附着くつついて、横向きに立っていたのは、俊吉の世帯としま年増の女中で。

二月ばかり給金の借かりのあるのが、同じく三月ほど滞とどつた、差配さばいで借りた屋号の黒い提ちようちん灯ちんを袖そでに引着けて待設ける。が、この提灯を貸したほどなら、夜中に店立たなだてをくわせもしまい。

「おい、……何だ、何だ。」と框かまちまで。

「あ、旦那様。」

と小腰こがしを屈かがめたが、向直つて、

「ちよつと、どうぞ。」と沈めて云う。

余り要ありそうなのに、急せき心に声こゑが苛いら立だつて、

「入れよ、こつちへ。」

「傘も何も、あの、雪で一杯でございますから。皆様のお穿はきものが、」

成程、暴風雨あらしの舟ふねが遁にげ込んださながらの下駄げこの並び方。雪が落ちると台なしという遠慮えんりょであろう。

「それに、……あの、ちよつとどうぞ。」

「何だよ。」とまだ強く言いながら、俊吉は、台所あかりから燈あかりの透とおく、その正面まっくらの襖ふすまを閉めた。

真暗まっくらになる土間そのなの其方そなたに、雪の袖そでなる提灯ていとう一つ、夜はるを遥おもい

がする。

ねぎ
劳らい心で、

「そんなに、降るのか。」といいいい土間へ。

「もう、貴方あなた、足駄あしだが沈みますほどでございます。」

聞きも果てずに格子に着いて、

「何だ。」

「お客様でございまして。」と少し顔を退どけながら、せいせい云う……道を急いだ呼吸いきづかい、提灯の灯の額際が、汗ばむばかり、てらてらとして赤い。

「誰だ。」

「あの、宮本様とおっしゃいます。」

「宮本……どんな男だ。」

時に、傘を横にはずす、とバサリという、片手に提灯を持直す
と、雪がちらちらと軒を潜った。

「いいえ、御婦人の方でいらつしやいます。」

「おんな
婦か？」

「はい。」

「婦だ……待ってるのか。」

「ええ、是非お目にかかりとうございますつて。」

「はてな、……」

とのみで、俊吉はちよつと黙った。

女中は、その太った軀を揉みこなすように、も一つ腰を屈めな

がら、

「それに、あの、お出先へお迎いに行くゆのなら、御朋輩ごほうばいの方に、御自分の事をお知らせ申さないように、内証ないしよでと、くれぐれも、お託ことづけでございましたものですから。」

「変だな、おかしいな、どこのものだか言つたかい。」

「ええ、御遠方。」

「遠い処か。」

「深川からおつしやいました。」

「ああ、襟巻なんか取らんでも可いい。……お帰り。」

女中はポカンとして膨れた手袋の手を、提灯の柄ごと唇へ当てて、

「どういたしましょう。」

「……可よし、直ぐ帰る。」

座敷に引返ひっかえそうとして、かたりと土間の下駄を踏んだが、ちよつと留まって、

「どんな風采ふうさいをしている。」と声こゑを密ひそめると。

「あの真紅まっかなお襦袢じゆばんで、お跣足はだしで。」

三

「第一、それが目に着いたんだ、夜だし、……雪が白いから。」
俊吉は、外がいとう套なも無しに、番傘で、帰途かえりを急ぐ中うちに、雪あしもで足

と許も辿々しいに付けても、心も空も真白まっしろに跣足はだしというのが身に染みる。

——しかし可訝おかしい、いや可訝おかしくはない、けれども妙だ、——あの時、そうだ、久しぶりに逢つて、その逢つたのが、その晩ぎり……またわかれになった。——しかもあの時、思いがけない、うっかりした仕損しそこないで、あの、お染そめの、あの体からだに、胸から膝へ血を浴びせるようなことをした。——

みまわせば、我が袖も、他ひとの垣根も雪である。

——去年の夏、たしか八月の末と思う、——

その事のあつた時、お染は白地あかし明石あいに藍あいで子持こもち縞じまの羅うすものを着ていたから、場所と云い、境遇も、年増の身で、小さな芸妓屋げいしやに

丸抱えという、可哀な流あわれながれにしがらみを掛けた袖も、花に、もみじ

に、霜にさえその時々の色を染める。九月と云えば、暗いのも、

明あかるいのも、そこいら、……御神燈なみ並なみに、紹ろなり、お召めしなり、単ひとえも

衣のに衣更きかえる筈はず。……しよぼしよぼ雨で涼しかったが葉月の声

を聞く前だった。それに、浅草へ出で勤て、お染はまだ間もなかつ

た頃で、どこにも馴染なじみは無いらしく、連立ゆつて行く先を、内証で、

抱かかえぬし主つたやの蔦家つたやの女房とひそひそと囁ささやいて、その指図さしずに任かせた

始末。

披露ひろめの日は、目も眩くらむように暑かつたと云った。

主人が主人で、出先に余り数はなし、母衣ほろを掛けて護謨輪ゴムわを軋きし

らせるほど、光った御茶屋には得意もないので、洋傘こうもりをさして、

抱主がついて、細かく、せつせと近所の待合小料理屋を刻んで廻った。

「かさかささして、えんえんえん、という形なの、泣かないばかりですわ。私もう、あかんぼ嬰児に生れかわった気になったんですけれど、なさけ情ないツてなかつたわ。

その洋傘かさだつて、お前さん、新規な涼しいんじゃないでしょう。旅で田舎を持ち歩行あるいた、黄色い汚点しみだらけなんじゃありませんか。

そしてどうです、長襦袢たら、まあ、やつぱりこれですもの。」
と包おまましやかに、薄藤色の半襟を、面瘦おもやせた、が、色の白おとがいい顯
でおさ圧えて云う。

その時、小雨の夜の路地裏の待合で、述懐しつつ、恥らつたのが、夕顔の面影ならず、はだえ膚を包んだくれない紅であつた。

「……この土地じゃ、これでないと不可いけないんだつて、主人が是非と云いますもの、出の衣裳だから仕方がない。

それで、白足袋でお練ねりでしょう。もう五にもなつて真白まっしろでしょう、顔はむらになる……奥山相当で、煤すすけた行燈あんどんの影へ横向きに手を支ついて、肩で挨拶あいさつをして出るんなら可いいけれど、それだつて凄すごいわね。

真昼まっびるま間でしよう、遣切やりきれたもんじゃありやしない。

冷汗かきだわ、お前さん、かんかん炎天に照附すべけられるのと一所で、洋傘かさを持った手がすべるんですもの、掌てのひらから、」

と二の腕が衝と白く、且つ白麻の手巾で、ト肩をおさええて、
 熟じつと見たまふた瞼の白露。

——俊吉は、雪の屋敷町の中ほどで、ただ一人。……肩袖をは
 たはたと払った。……払えば、ちらちらと散る、が、夜目にも消
 えはせず、なお白しら々としらとおも立たつ。

四

「この、お前さん手巾ハンケチでき、洋傘かさの柄を、しっかりと握あって歩あ
 行るきましたんですよ。

あとへ跟ついて来る女房おかみさんの風俗ふうツたら、御覽ごらんなさいなね。人

の事を云えた義理じやないけれど、私よりか塗立って、しよろし
 よる裾すそなが長か何かで、鬢びんをべつたりと出して、黒い目を光らかし
 て、おまけに腕まくりで、まるで、売うりますの口上言いだわね。

察して下さいな。」

と遣やるせ瀬なげに、眉をせめて俯ふしめ目になったと思うと、まだその上
 に——氣障きざじやありませんか、駈かけだ出しの女形がハイカラ娘の演する
 ように——と洋傘かさを持った風采なりを自ら嘲あざわらつた、その手ハンケチ巾を顔に
 当てて、水髪しや葱のぶしの雫ずく、縁に風りんのチリリンと鳴る時、芸妓げいこ島
 田を俯うつむ向けに膝つっぶに突伏した。

その時、待合の女房が、襖ふすま越ごしに、長火鉢とこしの処で、声を掛けた。

「染ちゃん、お出ばなが。」

俊吉はこれを聞くと、女の肩に掛けていた手が震えた……染ちやんと云う年紀としではない。遊女つとめあがりの女をと気がさして、なぜか不思議に、女もともに、侮りあなど、軽んじかろ、冷評ひやかされたような気がして、悚然ぞっとして五体を取つて引緊ひきしめられたまで、極きまりの悪い思いをしたのであつた。

いわゆる、その（お出ばな）のためであつた、女に血を浴びせるような事の起つたのは。

思えば、その女には当夜は云うまでもなく、いつも、いつまでも逢うべきではなかつたのである。

はじめ、無理をして廓くるわを出たため、一度、町の橋は渡つても、

潮に落行かねばならない羽目で、千葉へ行つて芸妓げいしやになつた。

その土地で、ちよつとした呉服屋に思われたが、若い男が田舎

氣質かたぎの赫かつと逆上のぼさせた深ふか嵌はまりつで、家も店も潰つぶした果はてが、女房子を

四辻うつちやへ打棄うつて、無理算段の足抜きで、女を東京へ連れて遁にげ

ると、旅籠住居はたごずまいの氣を換える見物の一夜。洲崎すさきの廓へ入つた時、

ここの大おおまがき籬かきの女を俺が、と手折たおつた枝に根を生はやす、返かえり咲さき

の色を見せる氣にもなつたし、意気な男で暮したさに、引手茶屋
が一軒、不景氣で分散して、売物に出たのがあつたのを、届くだ
けの借金で、とにかく手附ぐらいな処で、話を着けて引受けて稼
業わざをした。

まず引掛ひっかけの昼夜帯が一つ鳴つてゞ《しま》つた姿。わざと短

い煙管きせるで、真新しい銅壺どうこに並んで、立膝で吹かしながら、雪の素顔くろわで、廓くわくをちらつく影法師を見て思出したか。

——勘定つけをかく、掛かけすずりに袖でかくして参らせ候、——
二年ぶり、打絶えた女の音信たよりを受取った。けれども俊吉は稼業は何でも、主ぬしあるものに、あえて返事もしなかつたのである。

×《しめ》の形や、雁かりの翼は勿論、前の前すまいの下宿屋あたりの春は秋るあきの空を廻り舞つて、二三度、俊吉の今の住居すまいに届いたけれども、疑うたがいも嫉妬いしつとも無い、かえつて、卑怯ひきようだ、と自分を罵ののりながらも逢わずに過した。

臙おぼろおぼろ々よの夜も過ぎず、廓くわくは八重桜やえざくらの盛さかりというのに、女が先へ身を隠した。……櫛くし巻まきが棲白つましろく土手の暗くらがりを忍んで出たろう。

引手茶屋は、ものの半年とも持堪えず、——残った不義理の借金のために、大川を深川から、身を倒に浅草へ流着いた。：
てぎれ手切の髻かもじも中に籠めて、芸妓げいしやまげ髻げいしやまげに結った私、千葉の人とは、
わげきれいに分をつけ参らせ候。

そうした手紙を、やがて俊吉が受取ったのは、五重の塔の時ほとと
ぎす鳥。奥山の青葉頃。……

雪の森、雪の塀、俊吉は辻へ来た。

五

八月の末だった、その日、俊吉は一人、向島むこうじまの百花園に行

った帰途、三二圀のあたりから土手へ颯と雲が懸つて、大川が白
 くなつたので、仲見世前まで腕車で来て、あれから電車に乗ろう
 としたが、いつもの雑沓。急な雨の混雑はまた夥しい。江戸中
 の人を箱詰にする体裁。不見識なのはもちに捏ちられた蠅
 の形で、窓にも踏台にも、べたべたと手足をあがいて附着く。

電車は見る見る中に黒く幅つたくなつて、三台五台、群衆を押
 離すがごとく雨に洗い落したように軋んで出る。それをも厭わな
 い浅間しきで、児を抱いた洋服がやつと手を縫つて乗掛けた処を、
 鉄棒で払わぬばかり車掌の手で突離された。よろめくと帽子が飛
 んで、小児がぎやつと悲鳴を揚げた。

この発奮に、

「乗るものか。」

濡れるなら濡れろ、で、奮然として駈出したが。

仲見世から本堂までは、もう人氣もなく、雨は勝手に降って音

も寂寞としたその中を、一思いに仁王門も抜けて、御堂の石畳を

右へついて廻廊の欄干を三階のように見ながら、廂の頼母しさを

親船の舳のように仰いで、沫を避けつつ、吻と息。

濡れた帽子を階段擬宝珠に預けて、瀬多の橋に夕暮れた一人旅

という姿で、茫然としてしばらくイむ。……

風が出て、雨は冷々として小留むらしい。

雫で、不気味さに、まくっていた袖をおろして、しつとりとあ

る襟を掻合す。この陽気なればこそ、蒸暑ければ必定雷鳴が加

わるのであった。

早や暮れかかつて、ちらちらと点れる、灯の数ほど、ばらばら
たそがれ誰彼の人通り。

話声がふわふわと浮いて、大屋根から出た蝙蝠こうもりのように目前
 に幾つもちらつくと、柳も見えて、樹立こたちも見えて、濃く淡く墨に
 なり行く。

朝から内を出て、随分遠路とおみちを掛けた男は、不思議に遥々はるばると
 旅をして、広野の堂に、一人雨宿りをしたような気がして、里懐
 かしさ、人恋しさに堪えやらぬ。

「訪ねてみようか、この近処だ。」

既に、駈込かけこんで、一呼吸吐いた頃ひといきつから、降籠ふりこめられた出前でさきの雨

の心細さに、親類か、友達か、浅草辺に番傘一本、と思うと共に、
 ついそこに、目の前に、路地の出窓から、果敢はかない顔を出して格
 子すがに縫ぬって、此方こなたを差さ覗のぞくような気がして、筋骨すじぼねも、ひしひ
 しとしめつけられるばかり身に染みた、女の事が……こうした人
 懐ましさにいや増まさる。……

ここで逢うのは、旅路遥はるかな他国くるわの廓わで、夜更けて寝乱れた従妹いとこ
 にめぐり合つて、すがり寄る、手の緋縮緬ひぢりめんは心の通う同じ骨肉
 の血であるがごとく胸をそそられたのである。

抱えられた家も、勤めの名も、手紙のたよりに聞いて忘れぬ。

「可よし。」

肩ゆすを揺ゆつて、一ツ、胸で意気込んで、帽子うつむを俯うつむ向けにして、御

堂ひさしの廂ひさしを出た。……

軽い雨で、もう面おもてを打つほどではないが、引ひきし緊きめた袂たもと重おもたく、しよんぼりとして、九十九折つづらおりなる抜裏、横町。谷のドン底どの溝づづたい、次第に暗おくき奥山やまみち路。

六

時々足許あしごから、はつと鳥の立つ女の影。……けたたましく、可あ哀われに、心こころ悲かなしい、鳶とびにとらると聞はく果敢はかない蝉せみの声こゑに、俊吉は肝かんを冷ひやしつつ、※々《ぱっぱっ》と面おもてを照あらす狐きつね火びの御神燈ごんしんとうに、幾たびか驚おどいて目を塞ふさいだが、路も坂さかに沈しづむばかり。いよい

よ谷深く、水が漆うるしを流した溝端どぶばたに、茨いばらのごとき格子前さき、消えずに目に着く狐火が一つ、ぼんやりとして（蔦屋つたや）とある。

「これだ。」

密そつと、下へ屈かがむようにしてその御神燈みまわをすすと、他ほかに小草おぐさの影

は無い、染次、と記した一葉ひとはのみ。で、それさえ、もと居たらし

い芸妓げいしやの上へ貼紙はりがみをしたのに記してあつた。看板かきを書かえる隙ひま

もない、まだ出たてだという、新しさより、一人旅の木賃宿に、

かよわい女が紙かみぶすま衾かみぶすまの可哀さが見えた。

とばかりで、俊吉は黙つて通過とほぎた。

が、筋向うの格子戸ねずみなきの鼠ねず鳴なに、ハツと、むささびが吠ほえた

ほど驚おどいて引返ひっかえして、蔦屋つたやの門を逆さかに戻かえる。

俯向うつむいてたたずゐるでまた御神燈を覗のぞいた。が、前刻さつぎの雨が降込んで閉めたのか、框かまちの障子は引いてある。……そこに切張きりばりの紙に目隠しされて、あの女が染次か、と思う、胸がドキドキして、また行過ぎる。

トあの鼠鳴がこつちを見た。狐のようで鼻が白い。

俊吉は取つて返した。また戻つて、同じことを四五度たびした。

いいもの望みで、木賃を恥じた外聞ではない。……巡礼の笈おいに国々の名所古跡の入つたほど、いろいろの影について廻つた三年ぶりの馴染なじみに逢う、今、現在、ここで逢うのに無事では済むまい、——お互に降つて湧わくような事があるう、と取越苦勞の胸むな騒さわぎがしたのであつた。

「御免。」

と思切つて声を掛けた時、俊吉の手は格子をおさせて、そして片足にげがま遁構えで立っていた。

「今晚は。」

「はい、今晚は。」

と平べつたい、が切口上で、障子を半分開けたのを、孤ひとつや家の婆ばばあ々かと思うと、たぼの張つた、脊の低い、年とし紀には似ないで、頸くびを塗つた、浴衣の模様も大年増。

これが女房とすぐに知れた。

俊吉は、ト御神燈の灯を避よけて、路地の暗い方へ衝つと身を引く。
白粉おしろいのその頸くびを、ぬいと出額おでこの下この、小慧こさかしげに、世智辛く

光る金壺かなつぽまなこ眼まなこで、じろりと見越して、

「今晚は。誰方様どなたさまで？」

「お宅に染次つてのは居おりますか。」

「はい居りますでございませう。」

と立塞たちふさがるように、しかも、遁にがすまいとするように、かまち框一杯にはだかるのである。

「ちよつとお呼び下さいませんか。」

ああ、来なければ可よかつた、奥も無さそうなのに、声を聞いて出て来ないくらいなら、とがつくり泥ぬかるみ濘ぬかるみへ落ちた気がする。

「唯ただいま今いまお湯へ参つてますがね、……まあ、貴方あなた。」と金壺眼は

いよいよ光つた。

「それじゃまた来ましよう。」

「まあ、貴方。」

風体を見定めたか、あわただ慌しく土間へ片足を下ろして、

「直じきに帰りますから、まあ、お上んなさいまし。」

「いや、途中で困ったから傘を借りたいと思つたんですが、もう雨も上りましたよ。」

「あら、貴方、串じょうだん戯ごじゃありません。私が染ちゃんに叱られますわ、お歸し申すもんですかよ。」

「相合傘でいらつしやいまし、染ちゃん、嬉しいでしょう、えへへへへ、貴方、御機嫌よう。」

と送出した。……

からかさ傘は、染次が褌つまを取ってさしかける。

「可いや厭かかあな媽々だだな。」

「まだ聞えますよ。」

と下へ、たもと袂の先をそつと引く。

それなり四五間、黙って小雨の路地あるを歩行く、……俊吉は少しづつ、……やがて傘の下を離れて出た。

「濡れますよ、貴方。」

男は黙だんまり然の腕組ゆして行く。

「ちよつと、濡れるわ、お前さん。」

やっぱり暗い方を、男は、ひそひそ。

「濡れると云うのに、」

手は届く、羽織の袖をぐつと引いて突附けて、傘を傾けて、

「邪慳じゃけんだねえ。」

「泣いてるのか、何だな、大おおきな姉さんが。」

「……お前さん、可なつか懐しい、恋しいに、年とし齡に加減はありません

わね。」

「何しろ、お前、……こんな路地端ろじばたに立つてちや、しようがない

。」

「ああ、早く行きましょう。」

と目を蔽おうていた袖口をはらりと落すと、瓦斯がすの遠とお灯あかりにち
らりと翻かえる。

「少わかづくりで極きまりが悪いわね。」

と棲さばを捌さばいて取直して、

「極きまりが悪いと云えば、私は今、毛筋立を突張つっぱらして、薄化粧は可
いけれども、のぼせて湯から帰って来ると、染ちゃんお客様が、
ツて女房おかみさんが言ったでしょう。」

内へ来るような馴染なじみはなし、どこの素ひやかし見だろろうと思つて、お
やそうか何か気の無い返事をして、手てぬぐい拭ぬぐを掛けながら台所だいどころぐ
口ちから、ひよいと見ると、まあ、お前さんなんだもの。真赤まっかに
なつたわ。極きまりが悪くつて。」

「なぜだい。」

「悟られやしないかと思つてさ。」

「何を?……」

「だつて、何をツて、お前さん、どこか、お茶屋か、待合からか
けてくれれば可いじやありませんか、唐突だしぬけに内へなんぞ来るん
だもの。」

「三年越ごしだよ、手紙一本が当あてなんだ。大事な落しものを捜すよう
な気がするからね、どこかには違いないが、居るか居ない
か、逢えるかどうか分りやしない。おまけに一向土地不案内で、
東西分らずなもの。茶屋の広間にたつた一つ膳ぜんを控えて、待つて
いて、そんな妓こは居おりません。……居ますが遠出だなんぞと来て

みたが可い。御存じの融通ゆずうが利かないんだから、可よし、ついでにお
 銚子ちようしのおかわりが、と知らない女を呼ぶわけにや行かずさ、瀬
 ぶみをするつもりで、行つたんだ。

もつともね、居ると分つたら、門かどぐち口から引返ひっかえして、どこか
 で呼ぶんだつけ。媽々かかあが追掛おっかけるじゃないか。仕方なし奥へ入つ
 たんだ。一間ひとましかありやしない。すぐの長火鉢の前に媽々は控え
 た、顔の遣場やりばもなしに、しよびたれておりましたよ、はあ。

光つた旦那じゃなし、飛んだお前の外聞だっけね、済まなかつ
 たよ。」

「あれ、お前さんも性しやうわる悪わるをすると見えて、ひがむ事を覚えた
 ね。誰が外聞だと申しました、俊さん、」

取つた袂に力が入つて、

「女房おかみさんに、悟られると、……だと悟られると、これから逢う

のに、一々、勘定が要るじやありませんか。おまいりだわ、お稽

古だわツて内ないしよ証で逢うのに出憎いわ。

はじめの事は知ってるから私の年が年ですからね。主人の方じや目くじらを立てていますもの、——顔を見られてしまつてさ……しよびたれていましたよ、はあ。——お前の外聞だつけね、済まなかつた。……誰が教えたの。」

とフフンと笑つて、

「素人だね。」

「……わぎと口数も利かないで、一生懸命に我慢をしていた、御免なさいよ。」

声がまた悄しおれて沈んで、

「何にも言わないで、いきなり噛かじりつきたかつたんだけれど、澄し返なでつって、悠々と髪を撫なでつ着なでつけたりなんかして。」

「行場ゆきばがないから、熟しみじみ々しみじみ拝見まじみをしましたよ、……眩まぶしい事でございまして。」

「雪のようでしょう、ちよつと片膝立てた処ところなんざ、千年ものだわね、……染ちゃん大分御念入ごねいりだねなんて、いつもはもつと塗ぬれ、

もつと鬘たほを出せと云う女房おかみさんが云うんだもの。どう思ったか知らないけれど、大抵こんがらかつたらうと私は思うの。

そりや成りたけ、よくは見せたいが弱身だつて、その人の見る前じやあねえ、……察して頂戴。私はお前さんに恥かしかつたわ、お乳なんか。」

と緊しめられるように胸おきを压えた、肩ほっそが細りとして重そうなので、俊吉が傘を取る、と忘れたように黙つて放す。

「いいえ、結構でございました、湯あがりの水髪で、薄化粧さつを颯さつと直したのに、別してはまた緋縮緬ひぢりめんのお襦袢じゆばんを召した処と来た日にや。」

「あれさ、止よして頂戴……火鉢の処は横町から見通しでしょう、

脱ぐにも着るにも、あの、鏡台の前しかないんだもの。……だから、お前さんに壁の方を向いてて下さいと云ったじやありませんか。」

「だって、以前は着ものを着たより、その方が多かつた人じやないか、私はちつとも恐れやしないよ。」

「ねえ……ほほほ。……」

笑つてちよつと口籠くちごもつて、

「ですがね、こうなると、自分ながら気が變つて、お前さんの前だと花嫁も同じことよ。……何でしたっけね、そら、川柳とかに、下に居て嫁は着てからすつと立ち……」

「お前は学者だよ。」

「似てさ、お前さんに。」

「大きいお世話だ、学者に帯をメ《し》めさせる奴があるもんか、おい、……まだ一人じゃ結べないかい。」

「人、……芸者の方が、ああするんだわ。」

「勝手にしやがれ。」

「あれ。」

「ちつとやけらあねえ。」

「溝どぶへ落つこちるわねえ。」

「えへん！」

と怒鳴つて擦違いに人が通つた。早や、旧来もとた瓦斯がすに頬ほ冠かむりした薄青い肩の処が。

「どこだ。」

「いちなお直の塀の処だわ。」

直じきその近所であつた。

「座敷はこれだけかね。」

と俊吉は小さな声で。

「もう、一間ありますよ。」

と染次が云う。……通された八畳は、あかりあかる燈も明し、ぱつとして畳

も青い。床には花もいか活つて。山家を出たような俊吉の目には、博

覧会の茶座敷を見るがごとく感じられた。が、入る時見た、ふすま襖

ひとえ一重が直あがりかまちぐ上 框 兼帯の茶の室で、そこに、まげ鬘に結いつたしや娑婆

ばき気なのが、と膝を占めて構えていたから。

話に雀ほどの声も出せない。

で、もう一間とみまわすと、小庭の縁が折曲りに突当りが板戸にな

る。……そこが細目にあいた中に、月影かと思えたのは、ひさし廂に釣

った箱燈籠の薄明りで、植込を濃く、むこうへぼかしてうつつ薄りと

青い蚊帳。

ト顔を見合せた。

急に二人は更あらたまつたのである。

男が真まんなか中の卓子台ちゃぶだいに、ひじ肱を支いて、

「その後はのち。どうしたい。」

「お話にならないの。」

と自棄やけに、おくれ毛を揺ゆつたが、……心配はさせない、と云う

姉のような呑込んだやさし優ほほえみい微笑。

九

「失礼な、どうも奥様をお呼立て申しまして済みません。でも、お差向いの処へ、他人が出ましてはかえってお妨げ、と存じまして、ねえ、旦那。」

と襖越に待合の女房が云った。

ぴたりと後うしろで手にその後を閉めたあとを、もの言わぬ 応うけこたえ 答

にちよつと振返つて見て、そのまま片手に茶道具を盆ごと据えて立直つて、すらりと蹴けだ出しの紅くれないに、明石の裾ひを曳いた姿は、しと

しとと雨垂れが、子持縞こもちしまの浅黄に通つて、露いに活きたように美
しかつた。

「いや。」

とただ間拍子まびょうしもなく、女房の言いぐさに返事をする、俊吉の
膝つへ、衝と膝をのつかかるようにして盆ごと茶碗を出したのであ
る。

茶を充満いっばいの吸子きびしよが一所に乗つていた。

これは卓子台ちゃぶだいに載せると可よかつた。でなくば、もう少し間なかを
措おいて居れば仔細しさいなかつた。もとから芸妓げいしやだと離れたろう。前さきの
遊女おいらんは、身を寄せるのに馴なれた。しかも披露目ひろめの日の冷汗を恥
じて、俊吉の膝つに俯伏うつぶした処を、（出ばな。）と呼ばれて立つた

のである。……

お染はもとの座へそうして近々と来て盆ごと出しながら、も一度襖越しに見返った。名ある女を、こうはいかに、あしらうまい、——奥様と云ったな——膝に縋った透見をしたか、恥と怨を籠めた瞳は、遊里の二十の張が籠つて、熟と襖に注がれた。

ト見つつ夢のようにうっかりして、なみなみと茶をくんだ朝顔なり形の茶碗に俊吉が手を掛ける、とコトリと響いたのが胸に通つて、女は盆ごと男が受取つたと思つたらしい。ドンと落ちると、盆は、ハツと持直そうとする手に引かれて、俊吉の分も浚つた茶碗が対さくら吸きびしよ子も共に発奮はずみを打ってお染は肩から胸、両膝かけて、ざつと、ありたけの茶を浴びたのである。

むらむらと立つ白い湯気が、崩るる褌つまくれないの紅かげろうの陽炎のごとく包んで伏せた。

頸うなじを細く、面おもてを背けて、島田ななめを斜ななめに、

「あつ。」と云う。

「火傷やけどはしないか。」と倒れようとするその肩を抱いた。

「どうなさいました。」と女房飛込み、この体ていを一目見るや、

「雑巾々々。」と宙に躍つて、蹴返けかえす裳もすそに刎はねた脚は、ここに魅さした魔まの使つかいが、鴨居かもいを抜けて出るように見えた。

女の袖つけから膝へ湛たまつて、落葉うづが埋うづんだような茶殻すくを掬すくつて、仰あおむ向むけた盆の上へ、俊吉がその手の雫しずくを切つた時。

「可よござんすよ、可よござんすよ、そうしてお置きなさいまし、今

私わたくしが、」

と言いながら白に浅黄を縁へりとりの手巾ハンケチで、脇おきを圧おさえると、脇おきをおさえずおさぶと圧おさえると、膝ひざを、濡ぬれたのが襦じゆ袷あはを透とおして、明石あかしの縞しまに浸にじんでは、手巾ハンケチにひたひたと桃色ももいろの雫しずくを染ぞめた。――

「ええ、私あの時の事を思出したの、短刀で、ここを切られた時、」……

と、一年おいて如月きさらぎの雪ゆきの夜更よみぎけにお染ぞめは、俊吉しゅんきちの矢来やらいの奥おくの二階にがいの置炬燵おきこたつに弱々もたと凭もたれて語かたった。

さてその夜は、取とつて返かえして、両手りょうてに雑巾ざつしんを持もつて、待合まちあの女おんな

房あらわが顛あれたのに、染次は悄しおれながら、羅うすものの袖を開いて見せて、

「汚しみ点みになりましようねえ。」

「まあ、ねえ、どうも。」

と伸上つたり、縮んだり。

「何しろ、腕がなくツちやお前さん、直き乾くだけは乾きますか
らね……あちらへ来て。さあ——旦那、奥様のお膚はだを見ますよ、
済みませんけれど、貴あなた下げが邪じゃ慳けんだから仕方が無い。……」

俊吉は黙って横を向いた。

「浴衣と、さあ、お前さん、」

と引立てるようきみやくにされて、染次は悄しお々しおと次に出た。……組合あひあひ
の氣き脈やくが通かよつて、待合まちあひの女房にようぼうも、抱かかえぬし主ぬしが一いっ張ち羅らを着き飾かざら

せた、損を知つて、そんなに手荒にするのであろう、ああ。

十

「大丈夫よ……大丈夫よ。」

「飛んだ、飛んだ事を……お前、主人にどうするえ。」

「まさか、取つて食おうともしませんから、そんな事より。」

と莞爾にっこりした、顔は蒼白あおしろかつたが、しかしそれは蚊帳の萌黄もえぎが映つたのであつた。

帰る時は、効かいがい々しくぎつと干したのを端折はしよつて着ていて、男

に傘を持たせておいて、止せと云うに、小雨の中をちよこちよこ

走りに自分で俵くるまを雇つて乗せた。

蛇目傘じやのめを泥ひつかたに引傾げ、楫棒かじぼうをおさ圧えぬばかり、泥除どろよけにすが縋つ

て小造こづくりな女が仰向けあおもむに母衣ほろをのぞ覗く顔の色白々と、

「お近い内に。」

「……………」

「きつと？」

「むむ。」

「きつとですよ。」

俊吉は黙つて頷うなずいた。

暗く見えなかつたろう。

「きつとよ。」

「分つたよ。」

「可よござんすか。」

うるさ

「煩い。」と心にもなく、車夫の手前、宵から心遣いに疲れ果て

て、ぐったりして、夏の雨も寒いまでに身体からだもぞくぞくする 癩かんし

やく癩 まぎれに云つたのを、気にも掛けず、ほっと安心したように

立直つたと思うと、

「車わかいしゆ 夫さん、はい——……あの車賃は払いましたよ。」

「有るよ。」

「威張つてさ、それから少しですが御祝儀。気をつけて上げて下さいよ、よくねえ、気をつけて、可よござんすか。」

「大丈夫でございますよ、姉さん。」と楯かじを取つた片手に祝儀を

頂きながら。

「でも遠いんですもの、道は悪し、それに暗いでしょう。」

「承うけあい合あいましたよ。」

「それじゃ、お近いうち。」

影を引切ひっきるように衝つと過ぎる車のうしろを、トンと敲たたいたと思

うと夜の潮に引残されて染次は残ってしよんぼりと立つ。

車りが路を離れた時、母衣の中とて人目も恥じず、俊吉は、ツト
両り掌ようてで面を蔽おもてうて、はらはらと涙を落した。……

「でも、遠いんですもの、路は悪し、それに暗いでしょう。」

行方も知らず、分れるように思ったのであった。

そのまま等なおよ閑ざりにすべき義理ではないのに、主人にも、女にも、

あの羅うすものぐないの償をする用意なしには、忍んでも逢つてはならないと思うのに、あせつてもがいても、半月や一月でその金子かねは出来なかつた。

のみならず、追おいすが縫ぬいつて染次が呼出しの手紙の端に、——明石のしみは、しみ抜屋にても引受け申さず、この上は、くくみ洗いをして、人肌にて暖め乾かし候よりせむ方なしとて、毎日少しずつつくみ洗いたし候ては、おかみさんと私むしろにて毎夜添そいぶし臥ふし※。夜ごとにかわる何とかより針むしろの筵むしろに候えども、お前さまにお目もうじのなごりと思ひ候えば、それさえうつつ心に嬉しく懐しく存じ※……

ふくみ洗いで毎晩抱く、あの明石のしみを。行かれるものか、

素手で、どうして。

秋の半ばに、住かえた、と云つて、ただそれだけ、上州伊香保から音信たよりがあつた。

やがてくわしく、と云うのが、そのままになつた——今夜なのである。

俊吉は撈取はかどらぬ雪を踏ふみしめ踏ふみしめ、俣くるまを見送られた時を思出すと、傘も忘れて、降る雪に、頭つむりを打たせて俯向うつむきながら、義理と不義理と、人目と世間と、言訳なつかなさ可懐なつかしさ、とそこに、見える女の姿に、心は暗やみの目は、ぼうとして白い雪、睫毛まつげに解けるか雫しずくが落ちた。

「……そういつたわけだもの、ね、……そんなに怨むもんじやない。」

襦袢一重の女の背へ、自分が脱いだ緋の綿入羽織を着せて、その肩に手を置きながら、俊吉は向い合いもせず、置炬燵の同じ隅に凭れていた。

内へ帰ると、一つ躓きながら、框へ上つて、奥に仏壇のある、襖を開けて、そこに行火をして、もう、すやすやと寐た、撫つけの可愛らしい白髪と、裾に解きもののある、女中の夜延とを見て、密とまた閉めて、ずかずかと階子を上ると、障子が閉つて、張合

の無きは、燈あかりにその人の影が見えない。

で、嘘だと思つた。

ここで、トボンと夢が覚めるのであろう、と途中の雪の幻さえ、一斉に消えるような、げっそり気の抜けた思いで、思切つて障子を開けると、更紗さらさを掛けた置炬燵の、しかも机に遠い、縁に向いた暗い中から、と黒髪が揺ゆめいて、窠やっれたが、白い顔。するりと緋縮緬ひぢりめんの肩を抽ぬいたのは夢ではなかつたのである。

「どうした。」

と顔を見た。

「こんな、うまい装なりをして、驚いたでしょう。」

と莞爾にっこりする。

「驚いた。」

とほつと呼吸いきして、どつか、と俊吉は、はじめて瀬戸ものの火鉢の縁へりに坐つたのである。

「ああ、座蒲団ざぶとんはこつち。」

と云う、背中に当てて寝ていたのを、ずらして取ろうとしたのを見て、

「敷いておいで、そつちへ行こう、半分ずつ、」

と俊吉はじめて笑つた。……

お染は、上野の停車場から。——深川の親の内へも行ゆかず——
—じかづけに車でここへ来たのだと云う。……神楽坂は引上げた
が、見る間に深くなる雪に、もう郵便局の急な勾配で呼吸いきついて、

我慢にも動いてくれない。仕方なしに、あれから路みちの無い雪を分けて、矢来の中をそつちこつち、窓明りさえ見れば気きが兼かねをしいしい、一ひととき時ばかり尋ね廻つた。持つてた洋傘こうもりも雪に折れたから途中で落したと云う。それは洲崎を出る時に買ったままの。憑つきものようだと、と寂しく笑つた。

俊吉は、卮まんじの中を雪に漾ただよう、黒髪のみだれを思つた。

女中が、何よりか、と火を入れて炬燵すそに導いてから、出先へ迎むかひに出たあとで、冷いとだけ思つた袖も裙すそも衣類きものが濡れたから不気味で脱いだ、そして蒲団の下へ掛けたと云う。

「何より不気味だね、衣類きものの濡れるのは。……私、聞いても悚然ぞつとする。……済まなかつた。お染さん。」

女はそこで怨んだ。

帰る途みちすがらも、真実の涙を流した言訳を聞いて、暖い炬燵の膚はだのぬくもりに、とけた雪は、齊ひとしく女の瞳に宿った。その時のお染の目は、大く睜おおきみはられて美しかった。

「女中ねえさんは。」

「女中か、私はね、雪でひとりでに涙が出ると、茫ぼつと何だか赤いじやないか。引ひっこす擦こすってみるとお前、つい先へ提ちようちん灯あかりが一つ行くんた。やっと、はじめて雪の上に、こぼこぼ下駄のあとの印ついたのが見えたつけ。風は出たし……歩ある行き悩なやんだろう。先へ出た女中がまだそこを、うしろの人足ひとあしも聞きつけないで、ふらふらして歩ある行あるいでいるんだ。追おっつ着ついてね、使つかいがこの使つかいだ、手てを曳ひく

ようにして力をつけて、とぼとぼ遣りながら炬燵の事も聞いたよ。

しんせつついでだ、酒屋へ寄ってくれ、と云うと、二つ返事で快く引受けたから、図に乗つてもう一つ狐蕎麦を誂えた。」

「上州のお客にはちようど可いわね。」

「嫌味を云うなよ。……でも、お前は先から麵類を断つてる事を知つてるから、てんのぬきを誂えたぜ。」

「まあ、嬉しい。」

と膝で確りと手を取つて、

「じゃ、あの、この炬燵の上へ盆を乗せて、お銚子をつけて、お前さん、あい、お酌つて、それから私も飲んで。」

と熟と顔を見つつ、

「願ねがが叶いったわ、私。……一生に一度、お前さん、とそうして、

お酒が飲みたかった。ああ、嬉しい。余り嬉しさに、わなわな震えて、野暮なお酌くやしをすると口惜くやしい。稽古かけはないけをするわ、私。……ちよつとその小さな掛花活かけはないけを取つて頂戴。」

「何にする。」

「お銚子を持つ稽古するの。」

「狂人きちがいじ染いみた、何だな、お前。」

「よう、後生だから、一度だつて私のいいなり次第になつた事はないじゃありませんか。」

「はいはい、今夜の処とこは御意次第。」

そこが地袋で、手が直ぐに、水仙が少しすがれて、摺ずつて、危あやう

く落ちそうに縋すがつたのを、密そつと取ると、羽織の肩なまめを媚なまかしく脱掛だつけながら、受取うけとつたと思うと留とどめる間もなく、ぐ、ぐ、と咽喉のどを通として一息に仰あいで呑のんだ。

「まあ、お染。」

「だって、ここが苦しいんですもの、」

と白い指さで、わなわなと胸むねを擦さつた。

「ああ、旨おいかった。さあ、お酌。いいえ、毒どくなものは上げはしません、ちよつと、ただ口をつけて頂戴。花にでも。」

「ままよ。」……構かまわず呑のもうとすると雫しずくも無なかった。

花を唇くちびるにつけた時である。

「お酒が来たら、何にも思おもわないで、嬉うれしく飲のみたい。……私、

ほんとに伊香保では、酷い、情ない目に逢つたの。

お前さんに逢つて、皆忘れたいと思うんだから、聞いて頂戴。

……伊香保でね——すぐに一人旦那が出来たの。土地の請負師だつて云うのよ、頼みもしないのに無理に引かしてさ、石段の下に景ぶつを出す、射的の店を拵えてさ、そこに円鬻が居たんですよ。

この寒いのに、単衣一つでぶるぶる震えて、あの……千葉の。先の呉服屋が来たんでしよう。可哀相でね、お金子を遣つて旅籠屋を世話するとね、逗留をして帰らないから、旦那は不断女にかけると狂人のような嫉妬やきだし、相場師と云うのが博徒でね、命知らずの破落戸の子分は多し、知れると面倒だか

ら、次の宿^{しゆく}まで、おいでなさいって因果を含めて、……その時止^よせば可^かかつたのに、湯に入^いつたのが悪^あかつた。……帯を解^といたのを見^みられたでしよう。

——染^{せん}や、今日^{けふ}はいい天気だ、裏^{うら}の山^{やま}から隅^{ぐも}田^{でん}川^{がわ}が幽^{かすか}に見^みえるのが、雪^{ゆき}晴^はれの名^な所^{じよ}なんだ。一^{いっ}所^{しょ}に見^みないか^かつて誘^いうん^んですもの。余^{あま}り可^な懐^つし^かさに、う^うつ^つか^かり雪^{ゆき}路^{みち}を^の上^ぼつたわ。峠^{とげ}の原^{はら}で、た^たぶ^ぶさを取^とつて引^ひ倒^{きず}して、覚^{おぼ}えが^あらうと、ず^ずる^ずると引^ひ摺^すら^れて、積^つつた雪^{ゆき}が摺^すれる枝^{えだ}の、さい^{さい}か^かち^ちに手^て足^{あし}が裂^ひけて、あ^あの、実^まの真^ま赤^{あか}な^なのを見^みた時^{とき}は、針^{はり}の山^{やま}に追^お上^{のぼ}げ^られる雪^{ゆき}の峠^{とげ}の亡^な者^{しや}か、と思^{おも}つた^んです^がね。それ^{それ}から……立^た樹^{じゆ}に結^{ゆわ}え^られて、……」

「お染。」

「短刀で、こ、こことここを、あつちこつち、ぎらぎら引かれて
身体からだ一面に血が流れた時は、……私、その、たらたら流れて胸か
ら乳から伝うのが、渴きの留とまるほど嬉しかった。莞爾莞爾にこにこしたわ。
何とも言えない可いい心持だったんですよ。お前さんに、お前さん
に、……あの時、——一面に染まった事を思出して何とも言えな
い、いい心持だったの。この襦袢きです。斬きられたのは、ここだの、
ここだの、」

と俊吉みはの瞶みはる目に、胸を開くと、手ハンケチ巾ハンケチを当てた。見ると、顔
の色が真まつ蒼さおになるとともに、垂ぼたぼた々と血に染まるのが、溢あふれて、
わななく指もを洩もれる。

俊吉は突伏つつぷした。

血はまだ溢れる、音なき雪のように、ぼたぼたと鳴って留^やまぬ。
カーンと仏壇のりんが響いた。

「旦那様、旦那様。」

「あ。」

と顔を上げると、誰も居ない。炬燵の上に水仙が落ちて、花^{はない}

活^けの水が点^{した}滴^たる。

俊吉は、駈^{かけ}下^おりた。

遠慮して段の下に立った女中が驚きながら、

「あれ、まあ、お銚子がつきましてございますが。」

俊吉は呼^い吸^きがはずんで、

「せ、せ、折角だっけ、……客は帰ったよ。」

と見ると、仏壇に灯が点いて、老人が殊勝に坐つて、御法の
 声。

「……我常住於此 以諸神通力 令顛倒衆生 雖近
がじようじゆうおし いしよじんつうりき りようてんどうしゆじよう すいごん
 而不見 衆見我滅度 広供養舍利 咸皆懷戀慕 而生
にふけん しゆけんがめつど こうくようしやり げんかいえれんぼ にしようか

渴仰心……」

白髮しらがに尊ともしびき燈火の星、觀音、そこにおはします。……駈寄かけよつて、

はつと肩を抱いた。

「お祖母ぼあさん、どうして今頃御經を誦よむの。」

慌あわてた孫まごに、從しやうよう容ようとして見向まいて、珠数しゆずを片手ひとてに、

「あのう、今しがた私が夢むにの、美しい女おんなの人がござつての、回え
 向こうを頼たのむと言いわしつた故ゆゑにの、……悉くわしい事は明日話あしたそう。南なむみ

無よ妙う法ほう蓮れん華げ經ぎ。……
こうく廣よう供し養やう舍し利り げん咸かい皆い懷え戀れん慕ぼ にし而し生よう渴かつ

仰ご心う 衆し生じ既じ信しん伏ぷく 質し直ち意い柔じゆう。……」

新聞の電報と、続いて掲げられた上州の記事は、ここには言うまい。俊吉は年と紀し二十七。

いかほ野やいかほの沼のいかにして

恋しき人をいま一見見む

大正三（一九一四）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十五卷」岩波書店

1940（昭和15）年9月20日発行

※誤植箇所の確認には底本の親本を用いました。

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2007年2月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

第二菟蕪本

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>